

対話的な「話し手」の育成を意図したパブリック・スピーキング —短期大学部における授業実践と考察—

山 田 範 子

<要旨>

パブリック・スピーキングにおける聴衆は、話し手と対話的に「聞く」能力が必要である。学校教育におけるパブリック・スピーキングの指導は、これまで「話すこと」の視点でのみ捉えられがちだったが、「聞くこと」の視点を取り入れなければ「伝え合い」を目指すパブリック・スピーキングにはならない。そこで、筆者の担当する「日本語表現法Ⅰ」の講義では、パブリック・スピーキングを「話すこと」と「聞くこと」の双方向の活動として捉えた指導を行った。

本稿では、話し手との対話者であることを自覚する聞き手の育成を目指すとともに、対話的な聞き手をつくり出す話し手の育成を意図した実践を通して、本学学生の内面にどのような変容をもたらしたか考察した。また、学習前後のアンケート調査を分析した結果、短大生に必要なパブリック・スピーキングの指導の要点が明らかになり、新しい教材開発の必要性が示唆された。

キーワード：パブリック・スピーキング、スピーチ、対話、日本語表現法

1 問題の所在

パブリック・スピーキングは、『音声言語指導大辞典』において「聴衆の前で行われるスピーチ。話者と聴衆という役割分担があらかじめ明示的になされていることが定義的特徴である¹⁾」と説明されている。また、日本語教育に関するパブリック・スピーキング研究を行う深澤らは、パブリック・スピーキングを公的な性質を持つ口頭コミュニケーションであると捉え、「具体的には、意見表明やあいさつのスピーチ、プレゼンテーション（研究発表も含む）の他に、面接での自己紹介や会議での発言なども含まれると考える²⁾」と述べている。すなわち、パブリック・スピーキングとは、一人の話し手が複数の聞き手（聴衆）に向けて行う口頭コミュニケーション全般であると考えられる。

一方、日本経済団体連合会が行った「2017年度新卒採用に関するアンケート調査結果³⁾」より「選考にあたって特に重視した点」に注目してみると、第1位は「コミュニケーション能力」（15年連続）であった。口頭コミュニケーションであるパブリック・スピーキングは、新卒採用選考にあたって重視される能力の一つであると推測される。

しかしながら、「コミュニケーション総合調査<第3報>⁴⁾」によると、「複数の人の前で、

発表すること」を「苦手」「やや苦手」と回答した人の割合は、2060サンプル（大学生・会社員・主婦・リタイア層各515サンプル）の約75%であった。また、藤木⁵が大学生130名に対して行った「スピーチに対する自信」についてのアンケート調査では、「全くない」「あまりない」と回答した人は77%であった。

以上のことから、パブリック・スピーキングは社会人に求められる能力の一つであるが、その能力が身につけていないのが現状であると言える。特に、就職が間近にせまった短大生にとって、パブリック・スピーキング能力を向上させることは急務であると考えられる。

2 これまでの研究

本研究は、筆者の中学生を対象とした授業実践およびその教育効果をふまえて行う。従って、以下に筆者のこれまでの研究の概要を示す。

2.1 中学校国語におけるパブリック・スピーキング単元の認識

筆者は中学校教員として国語科を担当していた経験があり、中学校教科書（国語）におけるパブリック・スピーキング単元の認識について調査した⁶。その結果、次のことが明らかになった。

パブリック・スピーキングは、中学校国語教科書（2014年度使用）において、すべての出版社が第三学年で取り上げる単元であるが、教科書の記述には、パブリック・スピーキング成立において、欠けている点が存在している。パブリック・スピーキングの単元内に「聞くこと」が全く位置づけられていない点である。パブリック・スピーキングは、一人の話し手が多数の聴衆に向けてスピーチをする「独話」であることから、「話すこと」の学習のように捉えられがちである。しかし、パブリック・スピーキングは聴衆の存在があるからこそ成立するものであり、「話すこと」と同時に聴衆の一人として「聞くこと」の視点を取り入れる必要がある。

以上のことから、筆者は、パブリック・スピーキングが義務教育最終段階において重要視されているにもかかわらず、その教育効果が上がりにくいのは「聞くこと」の視点が存在せず、偏りが生じているためではないかと推測した。

2.2 中学校国語におけるパブリック・スピーキング単元の実践

筆者は富山大学人間発達科学部附属中学校に勤務した2015年度において、パブリック・スピーキング単元の実践研究を行った⁷。パブリック・スピーキングを「聞くこと」の視点から捉え、話し手と対話的に聞くことのできる聞き手の育成を目指すとともに、対話的な聞き手をつくり出す話し手の育成を意図した授業を行い、生徒の内面がどのように変容したのか調査した。

調査は、同校の2年生（有効回答数138）に対して、アンケート調査と自由記述の二種

類の方法で行い、パブリック・スピーキングの学習前後で生徒の意識がどのように変容したか比較した。

2.2.1 アンケート調査

パブリック・スピーキングに対する生徒の意識がどのように変容するのか確認するため、パブリック・スピーキングの学習前後において、以下の12項目についてアンケート調査を行った。

- 1 スピーチを考える前に、聴衆が何人であるかを確認する。
- 2 スピーチを考える前に、聴衆が聞きたい内容は何か推測する。
- 3 自分のスピーチが聴衆にとっても有益であるかどうかを考える。
- 4 スピーチのテーマは、自分が話したくて仕方がない、ワクワクするようなテーマを選ぶ。(決められたテーマでは自分でそのようにアレンジする。)
- 5 スピーチを考える前に、スピーチを行う会場の状況を確認する。
- 6 スピーチを行うにあたっては、実際の会場・鏡の前・家族の前などで十分な練習をする。
- 7 スピーチを考えるときは、与えられた時間を意識する。
- 8 聴衆を自分のスピーチに引き込む工夫は誰にでもできる。
- 9 聴衆の一人ひとりと対話するようにスピーチすることは難しい。
- 10 スピーチを行うときに、聴衆の一人ひとりと対話するようにすれば、緊張する必要はない。
- 11 自分にとって興味のないスピーチでも積極的に聞こうとするべきである。
- 12 スピーチは話し手一人のものではなく、聴衆の存在を意識しなければならない。

2.2.2 アンケート調査の結果

12項目について「その通りである・実行したい」、「まあまあそう思う・できるだけ実行したい」、「そうは思わない・実行したくない」

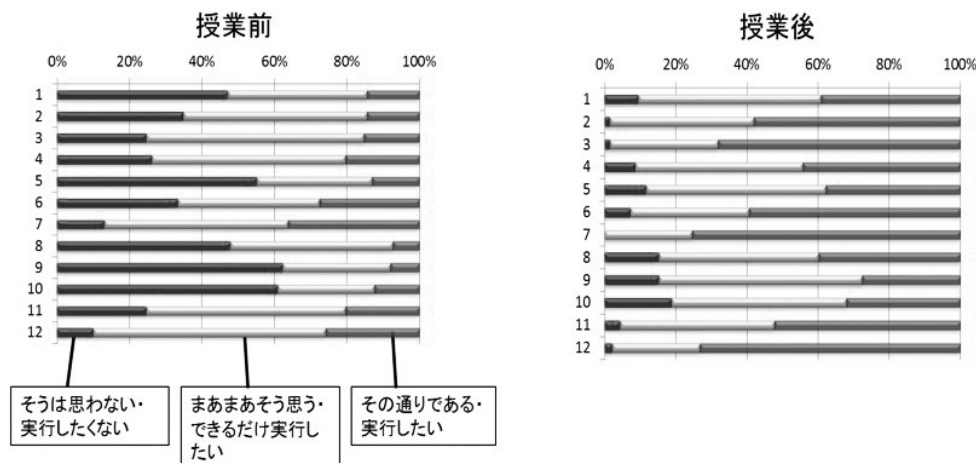


図1 授業前後における生徒の意識の比較

け実行したい」、「そうは思わない・実行したくない」の三段階で調査した結果、すべての項目で「そうは思わない・実行したくない」の割合が大きく減少した(図1)。特に、授業前「そうは思わない・実行したくない」と答える割合が高かった項目1、5、8、9、10では、授業後に半分以下となった。

2.2.3 自由記述調査

パブリック・スピーキングの学習前後で、「聞き手」「話し手」として自己の内面がどのように変容したか、過去→現在→未来にわけて自由に記述するよう指示した。

2.2.4 自由記述調査の結果

生徒の記述した内容をカテゴリー化し、結果を集計した。「聞き手」の変容についてのカテゴリーは次の棒グラフに示す8項目(図2)、「話し手」の変容については次の棒グラフに示す6項目(図3)とした。

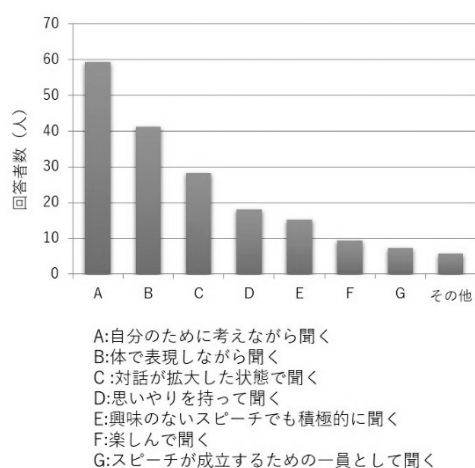


図2 「聞き手」の変容

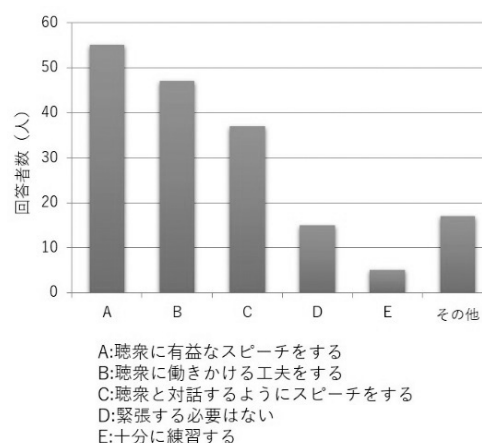


図3 「話し手」の変容

「聞き手」としての変容では、「体で表現しながら聞く」といった行動の変化を記述したものよりも、「自分のために考えながら聞く」「対話が拡大した状態で聞く」「思いやりを持って聞く」など意識の変化を記述したものの方が多かった(図2)。

一方、「話し手」としての変容においても、「聴衆に働きかける工夫をする」「十分に練習する」といった行動の変化を記述するものよりも、「聴衆に有益なスピーチをする」「聴衆と対話するようにスピーチをする」といった意識の変化について記述したものが多かった(図3)。また、「その他」に属する回答には、「スピーチには決まった型があると思い、難しく考えていた。しかし、今回の授業を終えて、決まりはないことがわかった」「ユーモアを交えることで聞き手が乗ってきてくれること、話し手自身も楽しめることを知った」「人前で話すことに自信を持った。急にスピーチを求められても即興でできるかもしれない」「特別な才能がなくてもスピーチはできると思った」など前向きに捉える傾向が確認された。

3 本研究の目的

前述のとおり、パブリック・スピーキングは社会人に求められる能力の一つであるが、その能力が身につけていないのが現状である。特に、就職が間近にせまった短大生にとっては、パブリック・スピーキング能力の向上は急務である。

「聞くこと」の視点を取り入れたパブリック・スピーキングの学習は、中学生において意識の変容をもたらすことが示唆された。しかし、同じことが短大生において言えるかどうか不明であるため、今回、中学校での実践と同様に、本学において、話し手との対話者であることを自覚する聞き手の育成を目指すとともに、対話的な聞き手をつくり出す話し手の育成を意図した実践を行った。

本研究では、「対話的パブリック・スピーキング」の学習を通して、本学学生の内面にどのような変容をもたらすか考察することを目的としている。なお、「対話的パブリック・スピーキング」とは、一対一の対話における話し手と聞き手の関係性を一対多のパブリック・スピーキングに押し広げた状態を指す。すなわち、一対多でありながら、一対一の心理状況であることを目指す。

4 研究方法

4.1 本学学生の実態把握のための事前調査

本学学生のパブリック・スピーキングにおける認識を把握するために、1年次学生181名に対してアンケート調査を行った。回答は160名から得られた。

4.1.1 パブリック・スピーキングに対する意識

パブリック・スピーキングに対する意識を確認するため、以下の2項目について調査した。②では、最もあてはまるものを選ぶよう指示した。

- ① 大勢の人前で「話すこと」と聴衆の一員となって「聞くこと」ではどちらが好きか。
- ② パブリック・スピーキングで抵抗を感じるのは聞き手が何人くらいのときか。
 - A 5人くらい B 10人くらい C 20人くらい D 30人くらい
 - E 40人くらい F 50人くらい G 80人くらい H 100人くらい
 - I 聞き手が何人でも抵抗を感じない。

4.1.2 パブリック・スピーキングの「聞き手」としての意識

「パブリック・スピーキングの聴衆の一人となったとき、どのようなことを意識しているか」という質問に対して、以下の項目を提示した。A以外を選んだ人については、B～Hのうち最もあてはまるものを1位として3位まで順位をつけるよう指示した。

- A 特に何も意識していない。
- B 場の雰囲気を壊さないようにしている。(寝ない、騒がないなど)
- C 話し手が話しやすいように配慮している。(あいづち、顔の向き、姿勢など)
- D 聴衆の一人であっても表現者であると意識している。
- E 話を楽しもうとしている。
- F 話の内容を理解しようとしている。
- G 話の矛盾点や弱点を見つけようとしている。
- H 自分の考えと比較しようとしている。

4.1.3 パブリック・スピーキングの「話し手」としての意識

パブリック・スピーキングの「話し手」としての意識について、以下のアンケート調査を行った。②では最もあてはまる項目を1位として3位まで順位をつけるよう指示した。

- ① 大勢の人前で「話すこと」は苦手か。
- ② なぜ苦手なのか。
 - A 緊張するから
 - B 何を話して良いかわからないから
 - C 自分に自信がないから
 - D 声を出したくないから (発音・発声に問題があるから)
 - E 聴衆の反応が気になるから

4.2 授業の実際

- (1) 講義名 「日本語表現法Ⅰ」
- (2) 対象学生
金沢星稜大学女子短期大学部1年次学生 (181名)
1クラス45名を基本に、4クラスにわけて実施
- (3) 配当回数
「日本語表現法Ⅰ」の講義全15回のうちの4回分配当 (90分×4=360時間)
- (4) 実施計画

第1回

- ① パブリック・スピーキングについてのアンケートを行う。
- ② アンケートを通して、これまで経験してきたパブリック・スピーキングの性質を明確化し、話し手・聞き手としての自己を検討する。
- ③ 「よく知っている友人」と対話した後で「クラスメイトではあるが、よく知らない人」と対話し、よく知らない人であっても友人のように対話するためにはどのよ

うにすればよいか考える。

- ④ 一対一の対話における聞き手は、次の瞬間に話し手にならざるを得ないため、能動的に聞くことができることを確認する。また、効果的な対話を行うために必要な能力を話し合う。

第2回

- ① TBSテレビ「A-Studio⁸」において、笑福亭鶴瓶氏とゲストの対話および鶴瓶氏のパブリック・スピーキングを視聴する。
- ② 鶴瓶氏のパブリック・スピーキングにおいて、どのようなところが効果的か話し合う。
- ③ 「A-Studio⁸」の視聴をふまえた対話を行う。ペアになり、ゲスト役の学生が話し手となって「私が克服したいこと」を鶴瓶氏役の学生に話す。鶴瓶氏役の学生は対話の聞き手となる。
- ④ 鶴瓶氏役の学生が、ゲスト役の学生に対してパブリック・スピーキングを行う。
- ⑤ 鶴瓶氏役とゲスト役の役割を交代する。

第3回

- ① 第2回の授業を通して考えたパブリック・スピーキングの「話し手」としての能力を能力表にまとめる。
- ② 筆者（教員）がパブリック・スピーキングの模範を示す。パブリック・スピーキングの聞き手（聴衆）に視点を限定するため、1クラス約45名の学生を聴衆（約20名）と聴衆を観察するグループ（約20名）に二分する。
- ③ 聴衆の聞く姿を観察し、意見交換する。
- ④ パブリック・スピーキングの「聞き手」（聴衆）としての能力を能力表にまとめる。
- ⑤ 学生の感想より、聴衆の一人であっても対話的に聞くことができることを確認する。
- ⑥ 次回は「私のたからもの」というテーマで一人ずつパブリック・スピーキングすることを予告する。

第4回

- ① 学生自らが作成した能力表より、今回のパブリック・スピーキングで意識したい能力をそれぞれ選び、パブリック・スピーキングを行う。また、聴衆の学生も能力表から意識したい能力を選び、パブリック・スピーキングを聞く。
- ② 対話的な話し手、聞き手になることができたか自己評価する。
- ③ パブリック・スピーキングの「話し手」としての能力を能力表にまとめる。
- ④ 自らの内面にどのような変容があったか、過去→現在→未来にわけて自由に記述する。

5 結果

5.1 アンケート調査

5.1.1 パブリック・スピーキングに対する意識

①「大勢の人前で『話すこと』と聴衆の一員となって『聞くこと』ではどちらが好きか」という質問に対して、「聞くこと」の方が好きと回答した人が圧倒的に多かった(図4)。前述のように、学校教育におけるパブリック・スピーキングの指導は、これまで「話すこと」の視点でのみ捉えら

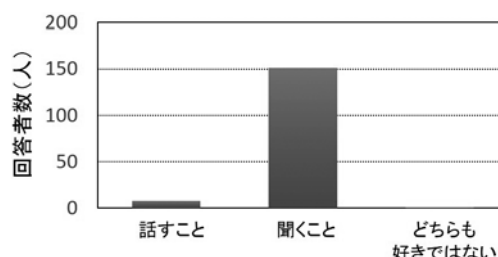


図4 パブリック・スピーキングに対する意識

れがちだった。従って、もし高等学校までのパブリック・スピーキングの指導効果があったと仮定した場合、本来ならば大勢の人前で「話すこと」が好きと答える人が多くいることが予想される。しかしながら、今回の調査では約94%の学生が「聞くこと」の方が好きと回答した。この結果は、パブリック・スピーキングを「話すこと」の視点でのみ捉えることで偏りが生じ、教育効果が上がりにくいのではないかという筆者の推測を裏付けていると考えられる。やはり、パブリック・スピーキングは話し手と聞き手双方向の活動として捉えるべきで、「聞くこと」の視点を指導に取り入れる必要があることが示唆された。

②「聞き手が何人くらいになるとパブリック・スピーキングに抵抗を感じるか」という質問に対しては、C「20人くらい」までの比較的少人数で抵抗を感じてしまう学生が全体の約75%を占めた(図5)。A「5人くらい」であっても抵抗を感じる学生が30人以上存在することから、本学学生におけるパブリック・スピーキングの指導は、一対一の対話からスタートするこ

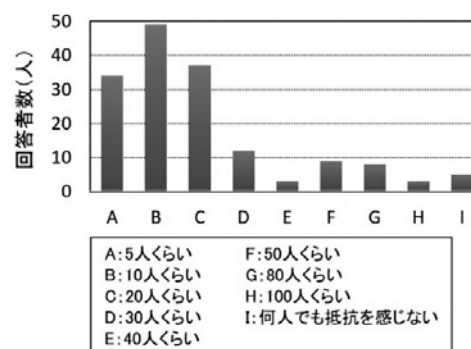


図5 聴衆の人数と抵抗感

とが望ましいと考えられた。また、授業では、抵抗感のピークである10~20人の聴衆サイズにおいてパブリック・スピーキングの指導を行うことが適切であると推測した。

5.1.2 パブリック・スピーキングの「聞き手」としての意識

前述の8項目について、Aおよび最もあてはまるものと回答した項目(1位)には3ポイント、2番目にあてはまると回答した項目(2位)には2ポイント、3番目にあてはまると回答した項目(3位)には1ポイントを与え、集計した。

F「話の内容を理解しようとしている」が203ポイントで最も多かった(図6)。次いで多かったのは、C「話し手が話しやすいように配慮している」とB「場の雰囲気を壊さない

ようにしている」であった。この2項目は、話し手の邪魔をしない系統の聞き方として捉えられる。また、A「特に何も意識していない」もC、Bとほぼ同じポイントであることから、本学学生のパブリック・スピーキングの「聞き手」としての意識は、大勢の聴衆にまぎれた受動的なものである可能性の高いことが示唆された。

一方、自分のために聞く系統であると考えられるH「自分の考えと比較しようとしている」、E「話を楽しもうとしている」は45ポイント以下、D「聴衆の一人であっても表現者であると意識している」、G「話の矛盾点や弱点を見つけようとしている」では10ポイント以下であり、聴衆の一人として能動的な聞き方には至っていないことが示唆された。

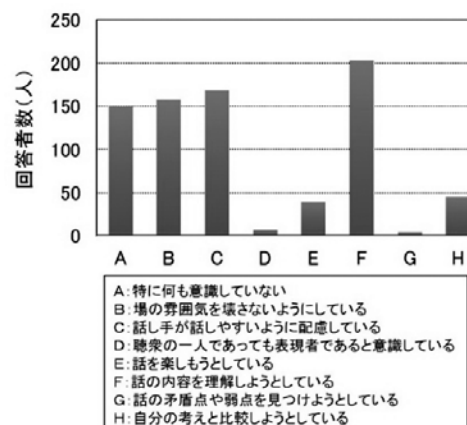


図6 「聞き手」としての意識

5.1.3 パブリック・スピーキングの「話し手」としての意識

①「大勢の人前で『話すこと』は苦手か」という質問について、苦手であると回答した人は全体の約85%であった(図7)。他方で、前述の5.1.1の結果では、大勢の人前で「話すこと」よりも「聞くこと」の方が好きだと答えた人の割合は約94%であった。両者の割合が接近していることから、パブリック・スピーキングにおいて、「話すこと」よりも「聞くこと」の方が好きと回答する人は、同時に「話すこと」が苦手である可能性が示唆された。すなわち、「聞くこと」が好きというよりも、「話すこと」が苦手であるので、どちらかというと聞いている方が楽だと捉える傾向があると推測した。

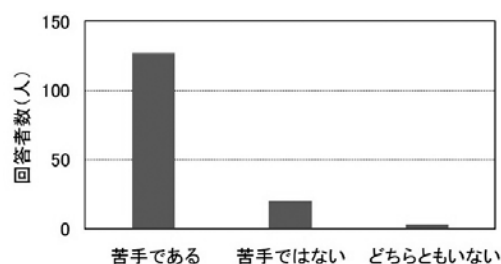


図7 パブリック・スピーキングの苦手意識

そこで、②「なぜ大勢の人前で『話すこと』が苦手なのか」調査した。最もあてはまる項目(1位)には3ポイント、2番目にあてはまると回答した項目(2位)には2ポイント、3番目にあてはまると回答した項目(3位)には1ポイントを与え、集計した。

突出してポイントが高かったのがA「緊張するから」(図8)であり、短大生にお

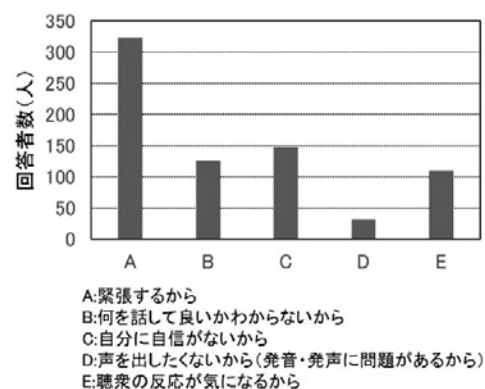


図8 苦手意識の要因

いては、緊張感の緩和がパブリック・スピーキングの苦手意識を克服するための鍵になると考えられた。また、「話すこと」の意識に関係するC「自分に自信がないから」とE「聴衆の反応が気になるから」を合わせたポイントは、「話すこと」の技術に関係するB「何を話して良いかわからないから」とD「声を出したくないから（発音・発声に問題があるから）」を合わせたポイントよりも高い値を示した。従って、人前で話すことの苦手意識を払拭するためには、技術面の指導よりも、学生の内面に働きかけて、その意識を変容させる指導が必要であると考えられた。

5.2 自由記述調査

5.2.1 内面の変容のカテゴリー化

自らの内面にどのような変容があったか、過去→現在→未来にわけて自由に記述したものの中で、学習後の変容にあたる「現在」「未来」の内容をカテゴリー化し（複数回答あり）、結果を集計した。中学校国語におけるパブリック・スピーキング単元の実践と比較するため、「聞き手」の変容および「話し手」の変容についてのカテゴリーを統一した。有効回答数は142であった。

聞き手としては、B「体で表現しながら聞く」ことをあげた学生が最も多かった（図9）。次に、D「思いやりを持って聞く」、A「自分のために考えながら聞く」、E「興味のないスピーチでも積極的に聞く」が続いた。今回、聴衆の一人であっても対話的に聞くことができるようになることをねらって授業を進めたにもかかわらず、C「対話が拡大した状態で聞く」をあげた学生が予想よりも少なかった。「その他」にはそれぞれ2名ずつが「自然に聞く」「メモをとる」と記述した。

話し手としては、B「聴衆に働きかける工夫をする」をあげた学生が最も多く、次いでC「聴衆と対話するようにスピーチをする」、D「緊張する必要はない」が高い値を示した（図10）。前述のように、中学校国語におけるパブリック・スピーキング単元の実践と比較するため、A～Eのカテゴリーを統一したが、本学学生では中学生にはなかった視点を記述

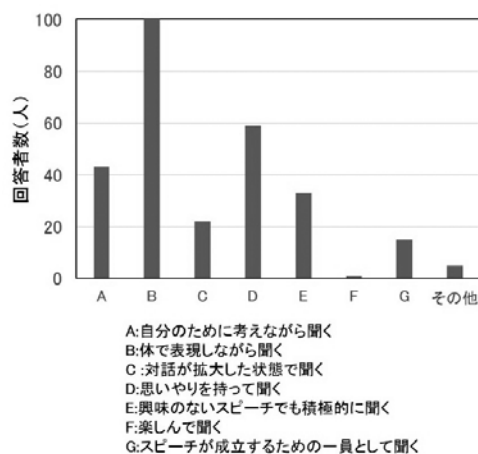


図9 「聞き手」の変容 (短大生)

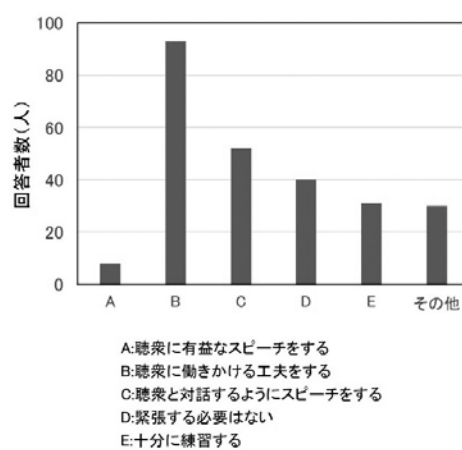


図10 「話し手」の変容 (短大生)

したため、「その他」の値が高くなっている。「その他」では、11名が「自分の言葉で話す」、8名が「自然に話す」、6名が「スピーチを楽しむ」という内容の記述をした。

5.2.2 自由記述の実際

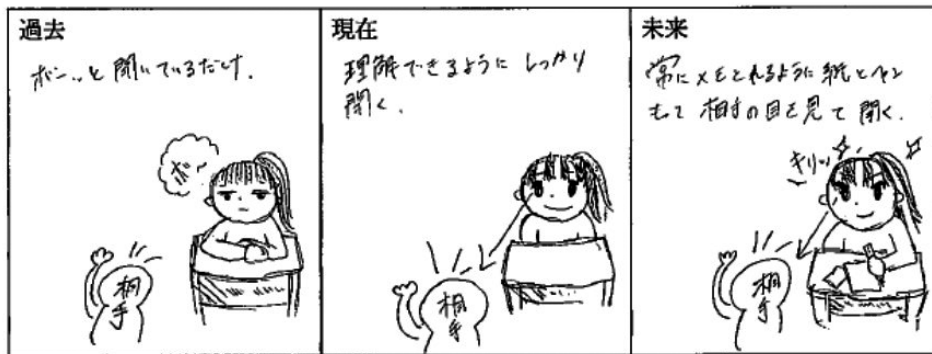
「聞き手」としての変容および「話し手」としての変容について、学生が自由に記入したものを以下に紹介する。

①「聞き手」としての変容

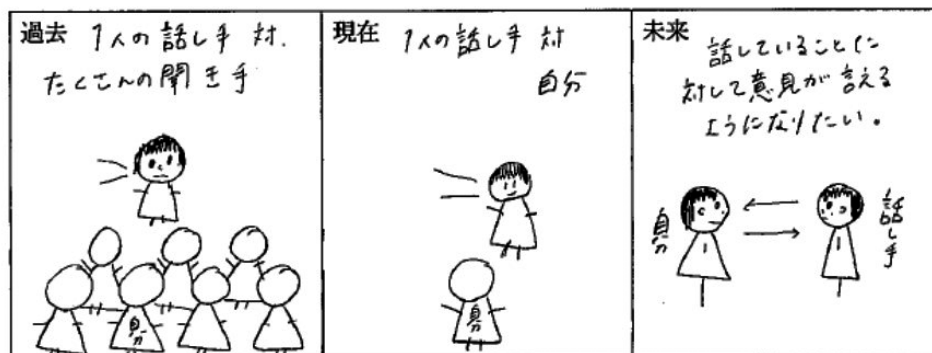
学生A Bに分類、聞き手も表現者として捉える



学生B AとBおよび「その他」に分類、「メモをとる」と記述


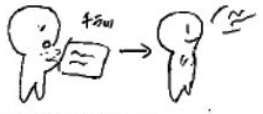
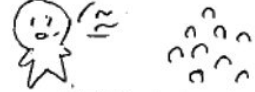


学生C AとCに分類、対話が拡大した状態、受動的な聞き手から能動的な聞き手へと変容



②「話し手」としての変容

学生D Cに分類、対話が拡大した状態に変容

過去	現在	未来
<p>スピーチの原稿をしっかりと作って、それを見ながらそのまま読むだけ。いいや、と思っている。</p> 	<p>原稿のようなものは作るけれど、意識してあまり見ないように前を見ることをし始める。</p> 	<p>話すことを頭に入れておいて、原稿がなくても話す。聞き手一人一人と話すように、顔もなるべく見るよう意識する。</p> 

学生E BとCに分類、対話の拡大、聴衆に働きかける工夫を記述

過去	現在	未来
<p>相手の方を全然見ない。</p> 	<p>一対一のような話す。</p> 	<p>聞き手が理解しているか確認しながら。ジェスチャーをまじえて。</p> 

学生C Cと「その他」に分類、対話が拡大、「自分の言葉で話す」と記述

過去	現在	未来
<p>たいていの人のために話す。</p> 	<p>一人一人の目を見て話す意識、原稿通りではなく「自分の言葉で」話す。</p> 	<p>聞いてくれている人一人一人に知らせる。1対1</p> 

5.3 本学学生が作成した能力表

今回の実践の過程において、「対話的パブリック・スピーキング」に必要なスキルを学生とともに考え、以下の能力表にまとめた。

対話的パブリック・スピーキング能力表(聞くこと)			
		パブリック・スピーキングを話す能力(対話の気づきから)	チェック
1	表情・姿勢	笑顔で聞く。	
2		自分の思う「良い表情」で聞く。	
3		感じたことを素直に表情で表現しながら聞く。	
4		自然体で聞く。	
5	応援する聞き方	話し手と目が合ったらほほえみかける。	
6		理解できたら、うなずくなど反応して、聞いていることを話し手に伝える。	
7		話し手の方に体を向ける。	
8	自分のための聞き方	真剣に話を聞く。	
9		話に集中する。	
10		メモをとりながら聞く。	
11		話の内容に興味を持つ。	
12		話の内容を理解しようとする。	
13		自分自身に問いかけながら聞く。	
14		話し手が最も伝えたいことは何か考えながら聞く。	
15		話し手の考えと自分の考えを比較しながら聞く。	
16		話し手の考えを自分なりに解釈しながら聞く。	
17		スピーチが終わったら質問するつもりで聞く。	
18	話し手を意識した聞き方	話し手の人柄に興味を持つ。	
19		話し手の気持ちになり、思いやる。	
20		話し手のことを信頼する。	
21	対話的な聞き方	一対一のときと同じように、自分に対して話してくれていると思って聞く。	
22		一対一のときと同じように、聞き手も表現者だと思って聞く。	

提案: 金沢星稜大学女子短期大学部 平成30年度一年生

		対話的パブリック・スピーキング能力表(話すこと)		
		パブリック・スピーキングを話す能力(鶴瓶さんの気づきから)	チェック	
1	準備	聞き手(聴衆)が何を求めているか取材して分析する。		
2	構成	聞き手(聴衆)が共感しやすい話を考える。		
3		聞き手(聴衆)が気持ちよくなるような話題を考える。		
4		聞き手(聴衆)にとってプラスとなるような話題を考える。		
5	相手意識	聞き手(聴衆)を理解しようとして、語りかけるような口調で話す。		
6		聞き手(聴衆)のことを尊敬する。		
7		聞き手(聴衆)が気持ちよくなるように話す。		
8		聞き手(聴衆)の顔を見る。		
9		聞き手(聴衆)に話しかけるようにする。		
10		聞き手(聴衆)全員に聞こえるように話す。		
11		聞き手(聴衆)の反応をふまえ、表情から考えを読み取りながら話す。		
12		聞き手(聴衆)に興味を示し、好意を持つ。		
13		話し方	いつもどおり自然に話す。	
14			飾らずに話す。	
15			フレンドリーに話す。	
16			自信を持って話す。	
17	本気で話す。			
18	アドリブを入れる。			
19	ユーモアを取り入れる。			
20	ジェスチャーをまじえて話す。			
21	自分の言葉で話す。			
22	強弱をつけて話す。			
23	考えの根拠を示しながら話す。			
24	一文を短く、簡潔に話す。			
25	過度な敬語を使わない。			
26	事実を伝えてから自分の考えを述べる。			
27	聴衆と一対一でいるように話す。			
28	事前取材やその場での情報を活用して話す。			

提案: 金沢星稜大学女子短期大学部 平成30年度一年生

6 考察

本研究では、以下の点について明らかになった。①本学学生のパブリック・スピーキングに対する苦手意識は、先行研究と同様に高く、「話すこと」に対する苦手意識は「緊張感」が大きな原因であることが確認された。②本学学生では、聴衆の一人としての聞き方が「自分のために聞く」よりも「話し手の邪魔をしないように聞く」方に意識が傾いていることが確認された。③対話的パブリック・スピーキングの授業実践により、本学学生の内面に能動的な聞き手、対話的な話し手に変容する意識の推移があったことを確認した。

今回の調査では、本学学生の約85%がパブリック・スピーキングに対する苦手意識を持っていることが確認された（図7）。藤木⁵が大学生に対して行った「スピーチに対する自信」についてのアンケート調査において、「全くない」「あまりない」と回答した人が77%であることから、本学学生の苦手意識は一般的な大学生と同じようなレベルにあると考えられる。また、学校教育におけるパブリック・スピーキングの指導は「話すこと」の視点でのみ捉えられがちであったため、高等学校までの学校生活を経験してきた本学学生においては「話すこと」の教育効果が上がっていることを期待したが、今回の調査では認められなかった（図4）。

「聞き手が何人くらいになるとパブリック・スピーキングに抵抗を感じるか」という質問に対して、「20人くらい」までの比較的少人数で抵抗を感じてしまう学生が全体の約75%を占めた（図5）。また、「5人くらい」のかなり少人数の聞き手であっても抵抗を感じる学生が全体の約20%確認された。本学学生が経験してきたこれまでの学校教育では、一クラスの人数が40人前後であったと予想され、パブリック・スピーキングを行う場合はクラス全員あるいはそれ以上を聴衆とすることが多かったのではないかと考えられる。学校教育における「話すこと」の教育効果が認められなかった原因の一つに、聴衆のサイズが適合していなかったことがあげられると推測した。今回の調査によって、本学学生におけるパブリック・スピーキングの学習に適した聴衆のサイズは10～20人であることが明らかになった。パブリック・スピーキングの指導にあたっては、まず、一対一の対話からスタートして徐々に抵抗感を軽減していき、10～20人の聴衆において練習するのが望ましいと考察した。

本学学生のパブリック・スピーキングの「聞き手」としての意識として、最もポイントの高かった「話の内容を理解しようとしている」以外では、「特に何も意識していない」「話し手が話しやすいように配慮している」「場の雰囲気壊さないようにしている」の3項目のポイントが高く、筆者はこの点に注目した。「話し手が話しやすいように配慮している」「場の雰囲気壊さないようにしている」ことは、自分のために聞くというよりも、話し手の邪魔をしない聞き方をしている可能性が高いと推測できる。「特に何も意識していない」項目のポイントが高いことを合わせて考えると、本学学生はこれまで大勢の聴衆にまぎれた受動的な聞き方をしてきたのではないかと考えられた。前述のように、学校教

育におけるパブリック・スピーキングの指導は、「話すこと」の視点でのみ捉えられがちである。小・中・高の学校教育を経た本学学生が受動的な聞き方をしている現状から、筆者は、パブリック・スピーキングの指導に「聞くこと」の視点を取り入れなければ、「自分のために聞く」聞き方には至らないと推測した。

本学学生におけるパブリック・スピーキングの「話すこと」に対する苦手意識は「緊張感」が大きな原因であることが確認された(図8)。アサヒグループホールディングスが行ったアンケート調査では、社会人の80%以上が「緊張しやすい」「あがり症」と回答し、中でも、緊張するシーンを「大勢の前でのスピーチ」と回答した人が最も多いことを報告している⁹。この結果から、短大生におけるパブリック・スピーキングの指導の要点は「緊張感の緩和」であると考えられた。また、緊張感以外の苦手意識の要因として多くの学生が「自分に自信がないから」「聴衆の反応が気になるから」と回答したことから、スピーチの技術に関わるスキルよりも、スピーチの意識に関わるスキルの獲得に向けた指導が必要であると考察した。

聴衆の一人としての「聞き手」について、自らの内面にどのような変容があったか自由記述したものをカテゴリー化して分析した結果、本学学生と中学生では差が見られた。まず、本学学生では「体で表現しながら聞く」カテゴリーが最も多い結果となり、これまでの受動的な聞き方から、聞き手を表現者として捉え、能動的な聞き方に変容した学生が多くいたことが確認された(図9)。しかし、次いで多かったカテゴリーが「思いやりを持って聞く」であることを関連づけて考えると、今回の実践では、話し手の邪魔をしない聞き方にとどまり、「自分のために聞く」聞き方まで到達することはできなかったと考えられる。特に、「聴衆の一人であっても話し手と対話的に聞くこと」をねらっていたにもかかわらず、「対話が拡大した状態で聞く」と記述した学生が少なかったことから、今後、さらに対話的な聞き方の指導を工夫する必要があると考察した。

「話し手」における変容では、中学生において最も多くの生徒が示した「聴衆に有益なスピーチをする」が本学学生では最も少ない回答となった。これは、今回の実践においてパブリック・スピーキングのテーマを「私のたからもの」としたことで、自己へ向かう意識が強くなりすぎ、聴衆へ意識が及びにくかったのではないかと考えられる。今後は、テーマ設定に配慮することや、決められたテーマであっても聴衆に意識を向ける指導の工夫が必要である。一方、本学学生においては、「聴衆に働きかける工夫をする」と記述した学生が最も多く、「聴衆と対話するようにスピーチをする」、「緊張する必要はない」があとに続いた。この結果より、「A-Studio⁸」における笑福亭鶴瓶氏の対話的パブリック・スピーキングに魅力を見出した学生が多くいたことが推測できる。

筆者は、鶴瓶氏のパブリック・スピーキングは「対話的」と捉えている。視線の固定・移動や聴衆への問いかけ表現の多用など、聴衆の一人ひとりと対話するような工夫がなされている。アメリカ合衆国のパブリック・スピーキングに関する先行研究では、Winans, J.A. が「Effective public speaking is really just an enlarged conversation (効果的な

パブリック・スピーキングとは、一対一の「対話」がただ拡大しただけのものである)^{10,11}と言及している。また、日本の「対話」における先行研究では、岡本夏木が「一次的ことばの子どもの世界では、教師の『皆さん』という語りかけは、『皆さん』という人に対して行われている¹²」と報告している。本来、人間は聴衆の一人であっても、話し手が自分に対して語りかけているという意識があり、対話的に「聞く」ことができるにもかかわらず、二次的ことば（学校生活で獲得することば）の習得が進むにつれ、その能力を忘れてしまっているのではないかと考えられる。従って、鶴瓶氏の「対話的パブリック・スピーキング」は本学学生にとって新鮮かつ刺激的であったのではないかと考察できる。筆者が勤務していた中学校・高等学校の実態から考えると、おそらく学校教育で行われているパブリック・スピーキング指導は、あらたまった場・あらたまった言葉で行われることが多いと推測できる。今回の調査において「その他」に「自分の言葉で話す」「自然に話す」「スピーチを楽しむ」という記述をした学生が多かったことから、対話的パブリック・スピーキングの実践が中学生よりも上の発達段階に位置する生徒・学生の心を動かすことが予想され、鶴瓶氏の対話的パブリック・スピーキングの視聴が内面の変容に大きく関係していると考えられた。

7 結論

話し手との対話者であることを自覚する聞き手の育成を目指すとともに、対話的な聞き手をつくり出す話し手の育成を意図した実践を通して、本学学生の内面に能動的な聞き手、対話的な話し手に変容する意識の推移があったことを確認した。

短大生におけるパブリック・スピーキングの指導の要点は、話し手の緊張感の緩和であると考えられた。緊張感の緩和を目指す新しいパブリック・スピーキングの教材開発の必要性が示唆された。

8 今後の課題

筆者は今回の研究を通して、パブリック・スピーキングにおける緊張感の緩和には「対話」で用いるスキルが必要であると仮説を立てた。今後は緊張感と対話およびパブリック・スピーキングとの関係性についての先行研究を調査・分析し、緊張感の緩和を目指す新しいパブリック・スピーキングの教材開発に取り組みたい。また、今回の実践で不十分であった「自分ために聞く聞き方」と「聴衆を意識した話し方」に関する指導の工夫を加えた新しい「対話的パブリック・スピーキング」の在り方を考察したい。

参考文献

- 1 高橋俊三『音声言語指導大辞典』（明治図書，1999）「パブリック・スピーキング」の項 柳沢浩哉
- 2 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子「日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査」（金沢大学留学生センター紀要第15号，2012）
- 3 日本経済団体連合会「2017年度新卒採用に関するアンケート調査結果」
<<http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/>> [2018年10月29日閲覧]
- 4 JTBコミュニケーションデザインホームページ「コミュニケーション総合調査<第3報>」
<<https://www.jtbcom.co.jp/article/hr/547.html>> [2018年10月29日閲覧]
- 5 藤木美奈子「初年次におけるスピーチ演習科目の実践と成果」（Obirin today：教育の現場から = In search of a learner-centered education 16, 2016）
- 6 山田範子「『聞くこと』に着目したパブリック・スピーキングの研究—アメリカ合衆国教科書との比較を通しての考察—」（全国大学国語教育学会発表要旨集 128, 2015）
- 7 山田範子「対話的な『聞き手』『話し手』を目指すパブリック・スピーキング—生徒の内面の変容からの考察—」（全国大学国語教育学会発表要旨集130, 2016）
- 8 TBSテレビ『A-Studio』（2018年6月29日放送分）
- 9 アサヒグループホールディングス「あなたが緊張する瞬間は？」
<<https://www.asahigroupholdings.com/company/research/hapiken/maian/bn/200904/00280/>>
[2018年10月29日閲覧]
- 10 Winans, J.A., *Public speaking: Principles and Practice* (Sewell, 1915)
- 11 Deanna L. Fassett・Keith Nainby, *A Student Workbook for Public Speaking* (SAGE, 2014)
- 12 岡本夏木『ことばと発達』（岩波新書，1985）